
あっちとこっち 【改訂版】

ゆさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あつちとこつち 【改訂版】

【Nコード】

N3424Z

【作者名】

ゆさ

【あらすじ】

彼女は、高校二年生。

叔父夫婦が経営する客商売の手伝いをするのが日課となっている。ある日、時間ぎりぎりまで旅館にいた彼女は、遅刻から逃れるべく自転車を全力でこいでいた。

学校はすぐそこにある。

セーフだと思った束の間、森の中で迷子になっていた。

木漏れ日差すところから空を見上げれば、葉の影に隠れて何か巨大

な物が飛んでいる。

あれって、飛行機だよね。そうだよ、きっと。
果てしなく広がる森を脱出するべく、見つけた轍にそって移動をはじめた。

二度にわたって異世界に潜り込んだ女子高校生と、ここがお前が産まれた世界だと主張し花嫁になれと強要する竜の話。

*警告タグは、意思表示です。

*拙作『あつちとこつち』を、三人称に改稿したものです。多少話が異なる場合がありますが、大筋は同じです。

条理と不条理と日常と

世の中不思議なことが沢山ある。星の数ほども表現することもあるが、そもそも宇宙に点在する星の正確な数なんて知ることができない。沢山と星の数、はたして量が多いのはどちらか。

沢山といえば、昨日から降り続けている雨量も不思議だ。

雨の中を徒歩で、あるいは小走りで傘をささずに進む。濡れたことによって服が含む水分量はあまり変わらないそうだ。とあるテレビ番組で今をときめくアイドルグループが、人工的に降らせた雨の中で寒さに震えながら実験をしていた。

くしゅん。彼らと同じ様に寒さに震えた彼女はくしゃみをひとつすると、両手の冷えた手先を擦り合わせて、失った体温を取り戻そうとした。

昨日の霧雨、今日はしとしとと弱い雨が降り続く。濡れた水分量は違うはずなのに、彼女は風邪を引いた。

「何を言っているの。濡れたことには変わりないんだから、風邪を引くのも当然でしょう」

彼女は、叔母の小言から逃げるように、頭から布団を被った。

不思議なことがあるように、理不尽な事も存在する。

彼女は、叔父から与えられた小遣いに窮していた。それも二ヶ月に渡っている。

必要最低限な物、例えば文房具など勉強や学校生活に必要な道具のみを購入する、そう決めてなんとか凌いでいた。

しかし、それも漸く終わりを告げた。ささやかなご褒美とばかりにお気に入りの喫茶店に入る。メニューにあるフレイバーコーヒーの値段を見て驚愕した。この二ヶ月のあいだに、原材料費高騰で値上げされていた事を知らなかったのだ。

涙をこぼしながらコーヒーを飲んだ。

彼女は高校生でもある。

両親は幼い頃に他界していて、父方の叔父夫婦と生活を共にしている。その叔父が経営する旅館の手伝いをする事が、彼女の日課になっていた。

毎朝、早朝勤務の仲居と同じ時間に起床し、身支度を整えて調理場へと向かう。

宿泊客の朝食のお膳の準備をし、仲居の補助を行う。その作業が一通り終わると、自身の軽めの朝食をとってから登校する。

彼女が通う高校は、旅館からそう遠くはない。自転車登校をしていて通学路にしている道は、近所の小学校の通学路でもある。閑静な住宅街を抜ける道だ。

その道路の中央をふらふらと歩く小学生に、注意を促すためベルをならした。小学生は瞬時に振り返り、うぜえうぜえ、と彼女に取っては聞くに堪えない言葉遣いを吐き、睨みつけるという洗礼を浴びせた。

「爽やかな朝なのに、どんよりしてるんじゃないわよ」

朝礼も終わり、一時限目の授業に入るまでの僅かな時間。彼女は、机に突っ伏したまま微動だにしないでいた。その姿を見た友人は、その活気の無さに呆れ果てる。

「登校中に、道で出会った小学生に蔑ろにされたそうです」

「はあ？ 小学生相手に何したの」

「自転車のベルを鳴らしただけですって」

代わりに隣の席の女子生徒が答えた。

「それだけ？ なんて言われた？」

「さあ。そこまでは聞いてないです」

机の縁に寄りかかると、指で背中を突く。一本二本と指を増やし、5本になると脇腹をくすぐり始めた。それを見た椅子に座る女子生徒も、同じ様に反対側の脇をくすぐる。すると途端に彼女は身を振らせた。

「ひゃあ、くすぐったいつ」

「ほら、だんまり決めてないで、さっさと言う」

「いうつ、言うからゆるしてください」

身を起こした彼女の顔はくすぐったさを耐える為か顔が歪んでいて、愉快的表情をしている。忙しく動くそれぞれの手を上から押さえて、乱れた呼吸を整えた。

「……う、うぜえって言われたの」

「そんだけ？」

「ああ、なんとなく分りました」

「そんだけって、なによ。……はじめてだったの、そんなこと言われたのは」

「女将さん、言葉遣いに厳しそうですものね」

「まみちゃん！ わかってくれる！？」

「いまどき、そんなくらいでー」

理解を示した友人の言葉に、先程の暗い気持ちを振り払い、ぱつと顔を輝かせた。意見が同調して嬉しいのである。

「席に着けー、授業を始めるぞー」

「じゃ、また後で」

教師が来て、合図を送ると同時に校内放送で鐘の音が流れる。教室室内は一瞬慌しくなり、椅子を引く音や駆け込む生徒の足音で騒がしくなった。

今日も滞り事無く全ての授業が終わり、お喋りに興じる者や気が早い者は帰り支度をし、担任が来るのを待っている。

彼女が在籍するクラスの担任は寛容な性格で、連絡事項も手短かに伝えてホームルームを終わらせ、他のクラスに憚ることなく生徒を帰していた。

「それじゃ、今日は此处までだな。掃除担当班はちゃんと掃除をしていけよ。それから、帰る者は気をつける事。この近辺でも、突然行方不明になる事件が起きている。警察に頼るような事件性は無いみたいだが、用心する事に越した事はないからな。だからといってお前らが世話になるなよ。じゃ、気を付けて帰れ」

「はい」

生徒一同が揃って返事をする。それに満足したかのように全体を見回した教師は、教卓の上を手早く片付けると教室から出て行った。生徒達は机を教室前方に寄せる中、掃除班にあたる生徒は箒や水を張ったバケツや雑巾を用意し、人が出て行くのを待ってから床を掃き始めた。

「ねえ、まみちゃん。行方不明事件ってなに？」

「知らないの？　ここ数日、行方不明になる人が続出しているそうなんです。二日三日経つとその人達がひよっこり現れるそうで、ただの家出だと警察が取り合ってくれないそうなのです」

「へえ」

横に並んで掃きながら、先程の教師が注意を促していた話題について問いかけた。

「新聞の地域欄に載ってますよ。ニュース番組でも、ほんの少しだけですけど放送されましたし」

「う、新聞読んでない。テレビも見えてない……。ああ、これだからドラマの話に付いていけないし、流行の曲だって分らないんだあ。録画じゃなくて、リアルタイムでみんなと話したいよ」

「ここいらの観光地はシーズンオフというものが無いから、仲居さん達も大変そうですね」

「うん、繁盛しているのは良いことなんだけどさ。宿題する時間を取るので精一杯だよ」

雑巾掛けが終わるのを待ち、がたがたと重ねた椅子と机の擦れる音をならしながら運ぶと、再び箒を動かし始めた。

「ただいまー」

「あなた、厨房の事務机の上に携帯電話を忘れたでしょう？ 今村さんが届けてくださったわよ、はい」

帰宅すると、女将である叔母が夕食の準備をしていた。食卓にはおかずが盛られた皿や味噌汁茶碗が並べられていて、あとはご飯が炊き上がるのを待つばかりだ。

「あれ、そうだった。すっかり忘れてた」

「あとで、お礼を言っときなさいね」

「はい。着替えてくるね。今晚は宴会はあるの？」

「ええ。八時には終わる予定よ。宿題は？」

「ある」

「じゃあ、お布団敷くのは駄目ね。お膳下げだけお願い」

分ったと返事をして、二階にある自室に向かった。仲居見習い色の制服に着替え、髪型も結上げて一まとめにする。人前に出ても恥かしくない様に薄い化粧を施して、鏡に微笑む。自分の笑顔を知ることが、接客業で重要なものだそうだった。彼女は、そう教わった。

階下から、女将の呼ぶ声が聞こえた。

「出来たわよ」

「はい、今行く」

扉の隙間から顔だけ出して返事をする。学校で出された課題を机の上に広げて、食後にやる自習の準備をした。仕事と学業を効率良くこなすために、僅かな時間も無駄には過ごせない。彼女なりの遣り方だ。

ダイニングルームに行くと、叔母は席について夕食を食べ始めていた。女性に舌は量が多い食事だが、昼食と夕食を兼ねている。黙々と箸を口に運ぶ叔母の隣りに座り、いただきますと手を合わせてから、箸を取った。

「ね、美夏さんは、この辺で起きてる行方不明事件を知ってる？」

「ええ、もちろん。高校生から大学生、新社会人の若い年層中心に消えてしまう事件よね。あなたも気をつけなさいね。といっても、ほんとうに突如として起こる様だから、気を付けようが無いみたいだけ」

「私、今日始めて知った」

「ああ、そうね。新聞を読む時間もないものねえ。航平さんに言って、時間を十分くらい減らしましょうか」

「え、いいよっ。みんなに迷惑かけちゃう。お膳だつて一気に運べないし」

「それくらい、どうにでもなるわよ。カートだつてあるんだし」

彼女の朝食準備を手伝う姿は、旅館のちょっとした名物にもなっている。重ねたお膳を片手で持ち上げ、上手くバランスを取りなが

ら調理場から大部屋まで運ぶのだ。それを見かけた散歩帰りの宿泊客に拍手をもらうくらいだ。

「それじゃあ、先に行くわね。宿題はちゃんと終わらせるように。食器洗いお願いね」

「うん、いつてらっしゃい」

食事を中断して、美夏を玄関まで見送った。

自転車と迷いの森

彼女は、物好きなお客様もいるんだな、と感慨深げに思った。

大道芸さながらにお膳を運ぶ仲居がいる。そういう噂を聞きつけたある一組の宿泊客は、遠路はるばる飛行機に乗ってかけつけたそうだ。

朝食準備の時間に起きることが出来なく見逃してしまったから、お膳を下げる様子を見てみたいと懇願された。

叔父夫婦に判断を仰いだ結果、お客様を満足させなければならぬ、との結論に達した。要望通りに高く積み重ねたお膳の底に手をあてて持ち上げ、廊下を歩くところを見せた。客はたいそう喜び褒めもしてくれたが、彼女が学校に遅刻するという事実は逃れようもない。

鬼の様な形相で自転車をこぎ、そして道に迷ってしまった。

その日、彼女の日常は崩れ去っていった。

「うおー、ここは何処かな」

毎日通っていた町並みが消え、現れたのはぽっかりと口を開けた薄暗い獣道だった。

一見は獣道に見えるようだが、ただの獣道ではない。雑草が地面を覆い隠しているが、熱帯雨林で見る様な灌木の類はない。花も無ければ、果実を実らせそうな植物も無い。

唯一あるのは、彼女の身長をはるかに凌ぐ巨木だけだ。

「森、よね」

自転車から降りて、地に立つ。天に向かって生える巨木を見上げ、彼女は首を傾げた。

「この木、何メートルあるのかな。十メートル？ 高層ビルぐらい？」

枝も葉も見えず、空さえも見えない。枯れ木も落ちてないから、火を熾そうにも熾せない。サバイバル生活をするには不向きな森だ。それでも、彼女は冷静さを忘れてはいなかった。

「ほんとはすごい驚いているけど、振り返ったら、いつもの町並みがあるんだわ」

自転車のハンドルを巡らせ、旅館があると思われる来た道に向けた。その間、小さく湧き上がった恐怖心に耐えるように目を閉じる。今は通勤通学の時間帯だ。先程すれ違った会社員の後姿やランドセルを背負った小学生を見ることが出来るだろう。

祈りを終えたときの様に、ゆっくりと目蓋をあげた。目に映りこんだ光景は、巨木の群れだけであつた。

「困つた、どうしよう」

再度ハンドルを回し、学校があるであろう方向に戻し、自転車をスタンドで固定をした。

この森には、人の気配が感じられず、物音が立たない。すぐに悩むべき事柄へと変化する。

固定した自転車に跨り、ペダルを踏みしめて後輪を空回りさせる。今はこの音一つさえも、彼女にとっては必要なものだ。

旅館というものに接し、客や従業員に囲まれた賑やかな生活からは、この静けさが不気味に感じられる。

「あー、無音つて駄目だ！ よく気が狂うつて言うけど、その前にもう駄目だよ。音、音が欲しいつ。あとちょっと肌寒いから、あつたかい所も！」

ハンドルに肘をついて凭れかかっていた彼女は、一際大きく叫ぶと猛然とペダルをこぐ。

「ここにいてもしょうがないから、学校があるかも知れない方向に進もうかな。そうしよう、そうしよう」

一旦自転車から降りて、スタンドの固定を外そうとした時だった。雑草の影に、溝の様な線状の跡があるのが目に映った。その場に

しやがみ、指先で草を払う。

「これって、もしかして轍？　ってことは車輪のついた乗り物がある。じゃあ、それなりに発展した文化や技術があるのね！」

芽吹いた希望に心を躍らせた彼女は、すつと勢い良く立ち上がった辺りを見回した。

「この轍は、村と村を繋いでいて、辿っていけば人に出会えるはず。よし、このまま真直ぐ進もう！」

出発点の目印として、爪先で地面に大きなバツ印を描く。鞆の中からカッターを取り出し、近場の木にもバツ印を刻んだ。

気を取り直して、自転車に乗りペダルを押して発進させた。

寂しさと不気味な静けさを払拭したくて、歌を歌う。

この轍がどこまで続くのか分らないから、体力温存のために無口で進もうと決めていたが、押寄せる孤独には耐えられなかったようだ。

似たような景色が続き、どのくらいの距離を進んだか判断つかなかったが、目の前に一筋の木漏れ日が降り注ぐ場所に行き当たった。自転車を停めて、その中央に進む。頭上を見上げれば、木々の葉の間から空と太陽が覗けた。

「太陽、だ。そういえば、普通に呼吸も出来るから、酸素はあるってことね。ある程度は生き延びられる」

少しでも太陽の光で暖をとりたいくなった彼女は、制服に土がつくのも構わず寝転んだ。

伝え合う音

木々がざわめく音がする。

強風が吹いたのか葉が揺れ動き、僅かに差し込む陽の光を乱してしまう。

心地良さに身を任せて夢の世界を漂っていた彼女は、日差しが当たらなくなったことに不満を抱き場所を変えようとして目蓋を開いた。

太く高く生える樹木の先、茂る葉の隙間に巨大な影がばやけた視界を横切った。

「ひこうき？」

空を飛ぶものといえば、飛行機かヘリコプターしか思い浮かばない。

垣間見た物体は、胴体の横幅は広く、縦にも長かった。飛行機の形と一致しない事もない。そうだ、あれは飛行機だ。自分が進んでいる方向に飛んでいった。やはり、この先には村があるのだ。

淡い期待が、確信に変わる。

「村じゃないのかも。飛行機が着陸できるんだから、人が大勢いて商業施設もある大きな街ね」

すぐさま自転車に乗り、移動しようとペダルに足を掛けたところで、ある事に気付く。

「飛行機らしきものがあるのに、陸地の移動は馬車？ 変ね、自動車とかはないのかしら」

呟いた疑問は宙へと消えていった。答えを持つ人間が、何処にもいない。

そして、彼女はまた静寂に包まれた。何よりも苦手としているものが、この森には溢れている。

「人の声、聞きたい」

幼い頃から仲居や宿泊客に囲まれて育った彼女は、毎日が賑やか

なのが当たり前で、一人になったことがない。それでなくても、この空間に生活音の類が一切無い。苦痛なことになりつつあった。

飢えから逃げるように自転車に飛び乗る。

この音の無い世界に、自転車という物はとてもありがたい存在だと彼女は思う。こういう形で、自転車に頼るなど思いもよらなかった。

チェーンが回転する音。

タイヤと地面が擦れて起きる音。

ベルが鳴らせる事。

風を切る音。

全て、自転車に乗れる事によって、感じたり聞くことができる。

もつとそれらの音を耳に入れたくて、轍のある道から外れ、木の根など小さな隆起が場所に方向転換しようとした時だった。

彼女の耳が、小さな金属音を拾う。微かに聞こえるそれは掠れた様な甲高い音で、徐々に大きくなって聞こえ、彼女との距離を縮めているようである。

身の危険を察知し、今しがた動かしたハンドルの先へと急ぎ進み、轍と木漏れ日から離れた場所にある一際大きな木の陰に身を寄せた。息を潜めて、訪れるものをじっと待つ。

乱雑に生える巨木の合い間を縫うようにして現れたのは、キヤタピラ付の電車の様な、乗り物らしき物体だった。

電車と呼ぶのも怪しい。正確にいうのなら、荷物を運ぶコンテナだろうか。車体の側面に窓は無く、中の様子は窺えない。しかし両端には、運転席なのか扉と小窓があり、個室が備え付けられていると分る。その車体を囲むように、鋭い突起物が連なった帯状の半透明の物体が、回転している。

車輪はキヤタピラーだ。これも一風変わったもので、コンテナに合わせて長く、幅は細い。車高が高い分、キヤタピラも高い造りだ。

枯れ木の様にちょっと触っただけでも崩れ落ちそうで、頼り無ささを感じさせる。

総じてものものしい戦車の様なそれは、次第に減速をし、木漏れ日があつた場所に止まつた。

甲高い音も止み、同時に空気が抜ける音もした。その様子から、しばらく此処に留まるという事が知れる。その証拠とばかりに扉が開き、二人の人間が梯子を使い地面に降り立つ。もう一人の姿も確認できたが、その人物は降りてくる気配がない。高台からの監視だろうか。

木の陰から顔を覗かせていた彼女は、どうしようもなくその場にしゃがんだ。

ただ、自分を見逃して、去ってくれる事だけを祈る。

「居る様子があるか？」

「分らない。騎車の音に驚いて逃げたのかも」

「そうだとしても、移動手段は徒歩しかない。そう遠くへは行けないだろう。殿下は、倒れていたと仰られていたし、身体の調子が悪いのかもしれない」

「ああ。この辺を重点的に探そう。上からの見張りは頼んだぞ」

「了解」

三人の会話が、彼女にも聞こえる。

内容は理解できた。日本語に近しい言語で、中には聞き慣れない単語もあつたが、自分を探しに来たという事だけでも分れば良いほうだろう。

問題は、この状況を如何にして切り抜けるか、だ。切り抜けられずとしても、帰る方法が分らない。八方塞だ。

ふと彼女は、自身の腹に手をあてた。切迫しているのに、空腹を感じたからだ。にわかには別の問題が浮上する。今は、どんなに小さい音でも隠したい。

ほんの数分前に求めていたものが、問題の種になるとは考えても

いなかった。

今すぐ帰りたい気持ちで、彼女の心は埋め尽くされているのに、動く事も移動する事も出来ない。

草を踏みしめる音が、一歩また一歩近づいている、そんな時だった。

靴の中で、携帯電話の着信音が鳴り響いた。

残された者の葛藤

「あ、丁度いいところに。いま代わります、少々お待ちください」
朝の一仕事を終えて、今日の予定を再確認しようと事務所に戻ってきた女将は、電話応対に出ていた副支配人に呼び止められた。

「女将さん、お嬢さんの学校の先生からお電話です」

保留音に切り替えた副支配人は、癖なのか雑音が入らないようにと手で塞いだ受話器を差し出す。

「学校の先生？ 用件は聞きましたか」

「ええ。お嬢さんが登校していないそうです」

「なんですって？」

にこやかな表情を一変させ、統率者としての凜とした顔つきになった女将は、副支配人に目配せして礼を告げると電話にでた。

「もしもし。お待たせいたしました、樋口でございます」

『お忙しいところ失礼致します』

「いいえ、とんでもない。うちの子が登校していないと聞きました
が」

『ええ。今日は欠席ではないのですか？ 先日から風邪を拗らせていたようですし』

「いいえ、風邪はとくに治りましたよ。今日はお客様からのご要望がありまして、出るのが遅くなってしまいましたけれど、確かにそちらに向かいました」

『そうですか……。携帯電話にも掛けてみたのですが、呼び出しになるときに電波が無いとアナウンスが入るのと半々なんですよね。もしかしたらまだお家に居るのかと思ひまして』

「まあ……。お手数掛けまして申し訳御座いません。旅館内には居りませんので、一度家に帰って確認します。見つけ次第締めなおし

て、折り返しお電話差し上げます」

『し、しめ……？』

「ああ、いえ。なんでも御座いませんわ」

『そ、そうですか……』

「ええ」

『では、宜しく願いたします』

「いいえ、こちらこそお手を煩わせてしまいまして、申し訳御座いません」

電話を切った女将は受話器を戻すと、自分専用の机の引き出しから携帯電話を取り出した。折りたたみ式のそれを開き、二度三度と指を動かすと耳に充てた。

（家出するような子ではないのにな、なにか抱え込んだのかな。この場に総支配人がいなくて、助かった。普段の手厳しさには慣れたけど、お嬢さんに対するアレはなかなか慣れん）

漏れ聞こえる音声と女将のやり取りを、聞くとはなしに聞いていた副支配人は、命あつての物種と心の底から思い、彼らの義理の娘に合掌する。

愛情を持つて接しているのは解るが、いくら身内の子といえど度が過ぎていやしないかと思う事が多々ある。厳しすぎるその態度は、しかして、当事者はいつもあっけらかんとしている。彼女も、自分と同じく慣れてしまったのか。いや、やはりそれだけは慣れないが。

「もしもし、秋君。お久しぶりね、元気？ ええ、元気だと思うわよ、連絡も無しに行方不明になるくらいは。なにか心当たりはなかしら。……そう、秋君も知らないのね。……ええ、願いますわ。では、また」

（お嬢さん、逃げてー。いや、おとなしく発見されてください、従業員の為にも！）

女将は一通り心当たりのある電話番号に掛けると、副支配人に向き直り声を掛けた。

「副支配人」

「はい」

「喉の調子でも悪い？　こんな仕事だから休む暇もないだろうけど、無理はしないでね」

「いえいえ、とんでもありません。……何か用件でも？」

書き物がある振りをして椅子に座っていた副支配人は、恐る恐る半身を捻り女将を見上げた。

「ちよつと家に戻ります。そんなに時間は掛けないけど、その間の事は宜しくお願いするわ」

「はい、分かりました」

「それから、あの子からの連絡があったら、すぐに私にも知らせてちょうだい」

「承知いたしました」

「それじゃあ、またあとで。……うふふ、お仕置きは何かいいかしら？　とりあえずは、いかがわしい本の如く隠し持っているクッキ―は没収しなくちゃね。それから、航平さんにみっちり扱いてもらわないと」

従業員用の出入り口に急ぐ女将の足取りは、心なしか小躍りしているように楽しげに弾んでいる。留守を任され、お嬢さんと従業員どちらを選ぶのかと葛藤する副支配人の目には、確かにそう映った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3424z/>

あっちとこっち 【改訂版】

2011年12月17日20時45分発行